

◆久松久子 選 ～思ひ出の一句～

「息子の一言」

「早く起きなさい！ 学校遅れるよ」の声掛けが、朝の決まり文句だった。息子は中学生になっても朝が苦手で、冬はストーブの前で眠そうな顔をしてじっと座っていた。朝ごはんを食べようとしないので、パンを口に入れてやり、牛乳を飲ませるのが毎朝のお決まりだった。

学校の先生に相談したが、「放っておきましょう。一人でできる迄待ちましょう。遅刻してもいいですよ」と、大らかな返答だった。

中学三年になった時、知人から、高校は山梨県の全寮制の航空学校にしてはどうかと勧められた。家族で相談し、みんなで受験勉強にも協力して、なんとか合格することができた。入学式の日、車の免許取りたての夫がハンドルを握ったが、高速道路は初めてという心細い運転だった。息子は学校の決まりで頭を丸坊主にし、学校から送られた荒鷲の校章のついた制服を着て車に乗り込んだ。後部座席に座った息子は、昔の士官学校の生徒の様で頼もしく見えた。

私は助手席で地図を見る担当だったが、地図を見るのも不慣れで、叱られながらの旅行だった。運転も下手で、ガタンガタンと揺れるたびに怖くて、ゆったりもたれて座っていることができなかった。

なんとか山梨の韮崎に入ると、辻ごとに航空学校の生徒が旗を持って案内してくれた。学校に着いてみると、まだ青い坊主頭の一年生が、大勢校庭に集まっていた。

入学式も終わり、生徒達は決められた寮に入って行った。父兄達は帰り始め、私達も車の方に歩き出した。息子は今頃、割り当てられた部屋に案内されているのだろうと思って、寮の方を振り返ると、昇降口から飛び出して来て、「死なないうで帰りや」と言って走って行った。

あんな頼りなかった子が、これからの自分の生活の不安よりも、親のことを

心配してくれたのかと嬉しかった。子どもは親が羨なければいけないのに学校に任せてしまったようで、親として恥ずかしいような、申し訳ないような気持ちになった。

それから間もなくして、先生に指導されたのか、立派な手紙が何通も届いた。受持ちの先生も、「卓球部に入り、県下で六位に入りました」「七十キロの行軍を遣り遂げました」と事あるごとにお手紙を下さった。クラスの中で一番、子ども子どもしているからと目を配ってくださった。

そして、一学期が終わり、待ちに待った夏休みになった。あの荒鷲の記事をつけた帽子と制服を身に着け、校名の入った鞆を持って帰って来た。夫が呼ぶと、「ハイ！」と、びっくりする様な立派な返事が返ってきた。

家に入ると、染みのついた枕カバーを取り出し、新しいものと替えて欲しいと言う。理由を聞けば、入学式の日の入寮の時、整列に遅れたとのことで往復ビンタをされ、倒れて口の中を切ったそうである。その晩は泣きながら寝たので、涙と血の染みがつき、洗ってもとれないとのことだった。

親に一言、声をかけに行ったために、遅れて叱られていたのだと、その時に初めて知ったのだった。

帰省子の大き返事の懐かしき 久子

「きれいな脳」

ゴミを出す日の朝、ゴミの入ったビニール袋を提げて指定のゴミ置き場に向かった。道すがら雀が鴉にでもやられたのか、半分ほどに短くなった羽根で死んでいた。車でも通ればペしゃんこにされてしまうと思ったが、触るのを躊躇ってしまった。

数日前、公園のベンチで握り飯を食べていたら、雀が一羽来て私を見上げていた。御飯をひとつまみ置いてやったのに、一突きしただけで飛んで行ってしまった。なんだ食べないのかと思っていたら仲間を連れて戻って来た。雀にも思いやりがあるのだと感心したことがあった。ひょっとしたら、あの時の雀か

もしれなかった。

そんな考え事をしていたのがいけなかったのか、玄関の石段まで戻った時、つまずいて仰向けにひっくり返ってしまった。両膝が悪く、右手は人工骨が入っている。とっさに動くのは口だけで、「アーッ」と叫んだら、近所の若いお父さんが駆けつけて起こしてくださった。

すぐに近所の脳外科でMRIを撮っていただいたら、幸い今のところ異常なしとのことだった。「九十歳近くでこんなきれいな脳は珍しい」と言われ、調子に乗って「俳句を四十年近くやっていますから」と自慢してしまった。頭のいい人の脳は皺が寄るというが、私のは皺がなく、雀の頭の方がましかもしれない。

軽くなつた脳味噌載せて踊かな 久子